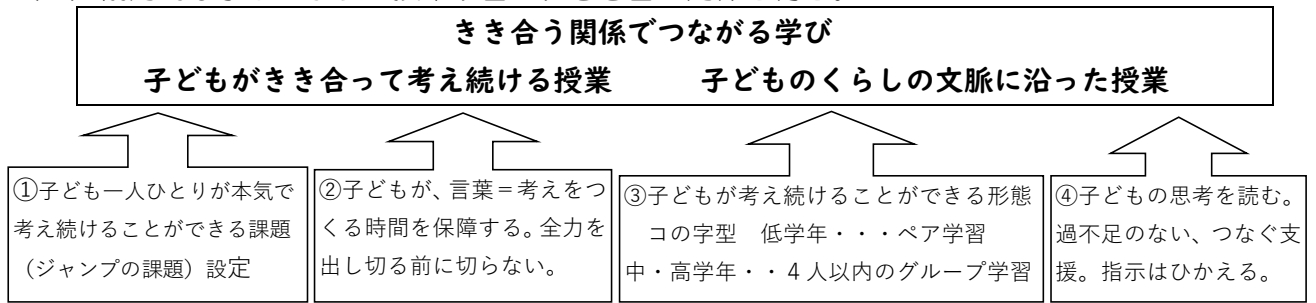


<様式>

学校名	山形市立出羽小学校 山形市大字漆山 3169 番地 TEL684-7321 FAX684-6451	校長	須藤 征治
		研究主任	佐藤 美代子
研究主題	考え続ける子どもを育てる（1年次） ～きき合う関係でつながる学びづくりを通して～		
前年度までの研究の概要と趣旨	<p><u>本校の教育活動について</u> 出羽小学校では、学校教育目標「自分・仲間・夢 かがやく出羽の子どもを育てる」を具現化するために、新たに「ひらめけ頭」「はみ出せ心」「とび出せ体」を成長の合い言葉として、全ての教育活動において、子どもと教師で目標を共有し取り組んでいる。そして、子ども一人一人が「なりたい自分」を具体的にイメージして、取り組みを考え、ふり返りながら生活することで、自分の居場所をつくり、自分らしく輝ける学校をつくっている。</p> <p><u>コロナ禍の子ども達の育ちについて</u> 昨年度は、感染対策、安全保障を最優先に子ども同士がつながることができる教育活動を模索し、工夫して実施してきた。運動会や児童会活動、たてわり班活動で、自分の願いを持ち、それを実現するために、仲間と共に試行錯誤する子どもの姿があらこちらで見られた。同時に私たち教師も、子どもが自分の課題と向き合い友だちと協働して学ぶことができるように何ができるか、何をしたらよいか試行錯誤し、子どもと子どもをつないできた。 2月の6年生を送る会の子どもの姿から、1年間の取り組みが子どもと子どもの心を確実につないできたことを見て取ることができた。数値にはまだ表れていない子どもの生の育ちの姿を、3年ぶりに教師みんなで共有できた。</p> <p><u>本校の研究で身に付いてきた資質・能力について</u> ・一生懸命考えたり、努力したりする心地よさが自己有用感（学びに向かう力）の向上につながっている。→自分に対して、希望や願いをもつことができる。 ・自分と他者は違い、違うからこそ一人一人が大切な存在で、お互いを尊重し合い、気を遣って共に生きなければならないことを知っている。 ・人は多様であることを知り、受容する感覚を身に付けることで、自分の見方を主張するだけでなく、折り合って生活できる。 ・一人では辿り着けないゴールにも、みんなで力を合わせると必ず辿り着けるというプラス思考とねばり強さがある。 ・経験を通して、人は温かいものだ実感し、一生懸命やってもできない時、困った時は助けを求めれば大丈夫という感覚を身に付けている。 ・周りに困っている人がいないか、その人のために自分ができることは何か、その人にとって何がよいことかなどを気にかけることができる。</p> <p><u>気にかかる子どもの姿について</u> コロナ禍の中で2022年度の全国の不登校の児童・生徒は過去最多の24万人超えで、4万8813人の大幅増となっている。本校にも同様の傾向が見られ、理由は様々に複雑化しているが、その一因として、他者とつながる機会が失われエネルギーがなくなってしまうことが挙げられる。不安や心配が先立ち安心して自分を開くことができない子どもの心の内が見える。</p>		

	<p>コロナ禍の収束が見え始めた今、私たち教師は、「学ぶことが楽しい」、「友だちと関わるっていいね」、「みんなといれば安心」、「一人じゃないから大丈夫」と思える学校を創っていかねなければならないと考える。</p>
<p>研究 主 題 設 定 の 理 由 と 研 究 の 目 標</p>	<p><u>ポストコロナの授業づくりをめざして</u> 先行き不透明な状態も落ち着き、社会の中では少しずつ生活の制限が解除されている。学校も同様だが、コロナ禍を様々な対応をしながら乗り越えてきた今、そのままとの生活に戻るのかというところでないことも多い。不自由を強いられた間、私たちは学校の在り方を考え、その中で、当たり前だと思っていたことを、実はそうでもなかったと感じたり、逆に、取り立てて注目することがなかった営みの必要性を改めて実感したりすることがあった。</p> <p>そのような日常の中で実感したことは、正解はない問題が本当に立ちほだかり、それを乗り越えるためには、持っている知識・技能を使って状況に合わせて最適・最善と思われる解を協働してつくっていかねなければならないということだった。実際、私たちもこの3年間、考えを出し合って何度も話し合い、子どもたちの学びを進めてきた。</p> <p>これらの貴重な経験から、これからの学校に求められるのは、子どもが、自分たちの学びとくらしと向き合って、他者と協働して最適解を導く経験を積むことだと考える。</p> <p>よって今年度も、ひとりぼっちをつくらない、子どもが安心して居られる学級づくりを土台に、「自分で考え続ける」「仲間のどんな話もきく」「自分の言葉で話す」の3つを大切に、くらしと授業をつないでいく。教室に「きき合う関係」を育み、子どもがくらしの中で身に付けてきたインフォーマルな知識や技能を活用して課題解決し、整理されたフォーマルな知識や技能を獲得していくことができるような授業をデザインすれば、子どもたちは安心して学び、授業で身に付けた力を日常生活でも発揮できるようになると考えた。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>○考え続ける子どもとは・・・ 最適解を求めて、友だちやテキストと向き合い、自分の考えをつくる子ども ※もちろん、考え＝言葉なので、自分の言葉（＝考え）で話す力も育つことになる。</p> <p>○きき合う関係とは・・・ 子ども同士がつながり、いつでも話せる、ちょっと見ることができるといふ安心感を持つ関係 「きき合う(協同)」には、次の意味がある。 聴く 相手の話にじっくりと耳を傾ける(ケアの共同体) 訊く わからないことを腑に落ちるまで、相手に尋ねる(探究の共同体) 利く 気が利く、鼻が利く等の機能としての利く(実践の共同体)</p> <p>○きき合う関係でつながる学びとは・・・ 困難な課題と出会っても、「きいてみよう」、「一緒に考えよう」と、学び方を自己決定し考え続ける過程を楽しむことができるような学び</p> </div>

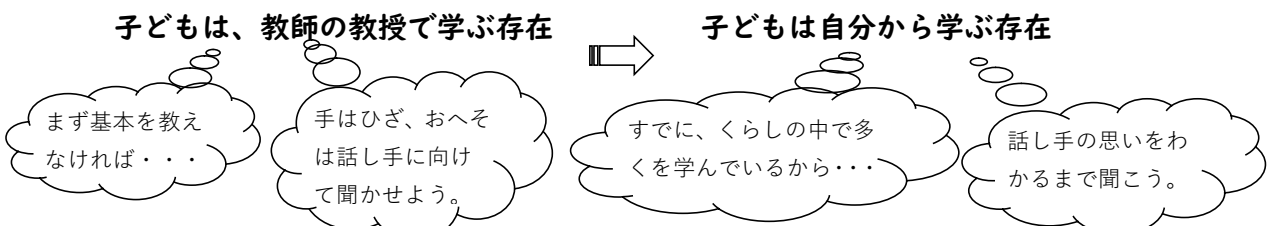
(1) 協同的な学びの手法で授業改善し、きき合う関係を育む。



(2) 子どもの思考とくらしの文脈に沿った単元構成を考える。

子どもがくらしの中で身に付けている既有知識や経験とつなげて課題解決に取り組むことができるようにコーディネートする。そして、知識や経験の概念化をはかる。

まずは私たちの意識をチェンジ



「させる」意識ではなく、「子どもが自分からできるようにする。」そのために、何ができると考え授業づくりをする。日常から、子どもの思考をていねいに見て取り、子どもの言葉や行為の意味を捉える技量を高める。

重点ア 教材研究

子どもの認識が更新される授業づくりのスタート

- ・どのような問いとの出会いが、子ども自身が、自分の中の曖昧だったこと、わかったつもりでいたことに気付いて、わかりたい・はっきりさせたい・解明したいという主体的な学びを引き出すか。
- ・自分の中の曖昧さや不確かなことが、どのようなプロセスをたどって、はっきりすっきり、整理され、より確かなものとなっていくのか。

重点イ 共有の課題とジャンプの課題の吟味

- ・共有の課題・・・基礎的、発展的内容も含めて、教科書にあるレベル
- ・ジャンプの課題・・・共有の課題と行ったり来たりしながら、考え続けることができるレベル

重点ウ 子どもと子どもをつなぎ、考えづくりを支える過不足のない支援

「言葉づくり=考えづくり」をしている状態にある沈黙を見て、子どもたちの思考がどこに向かおうとしているのか、考えているのか、わからなくて行き詰まっているのかを見極める。子どもが、言葉=考えをつくるための教師の「出」を考えていく。

・「戻し」

例えば、一所懸命話したAさんの話を、「Aさんの話、みんなはどういうことだと思う?」「Aさんの言いたいこと伝わった?どう伝わった?」と、子どもたちに戻すようにする。資料や文章にも戻す。Aさんの話やテキストとの対話を契機として、もう一度考えることで、曖昧だった自分の考えをはっきりさせることができる。

・「つなぎ」

子ども同士の関わりだけで解決できる限界を見極めて、どの子とどの子をつなぐと学びを深めることができるのか考え、「〇〇さんと話してみたら。」等つなぐ。また、学びから外れそうになっている子どもには寄り添い、対話しながら学びのステージへ戻す。

・「問い返し」

考えを話したAさんも、実は自分が何を伝えたいか臆気で、「何て言ったらいいのかな。」と迷いながら言葉を紡いでいることはよくある。言いよどんだり、立ち止まったりする時は、言葉＝考えづくりをしている最中であると見て取る。ケアの協同を発揮して、待つ。Aさんの言葉＝考えをきき合う。「それってどういうこと?」、「それは〇〇と同じ意味?」などと問い返し、Aさんの考えをみんなでわかっていく。Aさんからすると、「私はこういうことが言いたかったんだ。」と考えを言語化し、自分についての気づきを深めることができる。

(3) 「学力」について考え、子ども観、授業観のパラダイムシフトを図る。

カリキュラムマネジメント時に、学年で学習指導要領総則編や関連研究図書の資料を使って話し合い、教師一人ひとりが子どもの見方や授業の考え方を更新していく。また、日々の授業の進め方などは推進委員、学年主任がリーダーシップを取り、OJT機能を有効に使って学び合う。

研究の方法

(1) 授業研究会

担任は教科を選び、研究授業を行って教室を開く。

授業を参観する際は、授業者の意図を汲み、教えない、話しかけない。

授業後は、事後研便りを発行し、成果と課題を共有する。

※年度末に各自で資料をまとめ、研究集録とする。

①「みんなで授業を語る会」(大研)

・山形大学の森田智幸先生や講師を招聘して全職員で研修する。

・低学年部、中学年部、高学年部、特別支援部で1授業ずつ提案する。(計4授業)

・事前研は研究推進委員と該当学年部のメンバーで行う。

・森田智幸先生の来校日は、原則2時間目を研究授業、3、4時間目を通覧とし、午後に事後研究会を設定する。

・事後研は、ワークショップ形式や話し合い形式など適宜工夫する。

②「授業を語る会」(小研)・・・原則一人1回

・全13回。学年部で事前研と事後研を行う。

全教員に知らせ、研究推進委員だけでなく、誰でも参加できるようにする。

・授業は、可能な限り参加する。事後研に参加できない場合も、付箋に学んだことや具体的な子どもの学びの姿などを書き留めて記録者に渡す。

・推進委員と学年主任は、若い先生方が授業、事後研に参加できるように配慮する。

③事後研究会

授業研でしか学び合えないことで、汎用性のある子どもの見方について、重点的に話し合う。複数人の参観者で見るグループを特定し、同じ子どもについて見て取ったことを検討する。

本校の研究の根底には、「ひとりぼっちをつくらない」があります。担任は、多様化する子どもの言動からその子のものの見方や考え方をこれまで以上に理解する力を高め、その子どもに合った支援を考え、全ての子どもの資質・能力を伸ばさなくてはなりません。それが「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実であると考えます。また、同時に担任力がアップするようにならなければならないとも思います。このような意図から事前研、事後研を学びを共有する重要な機会と位置づけます。

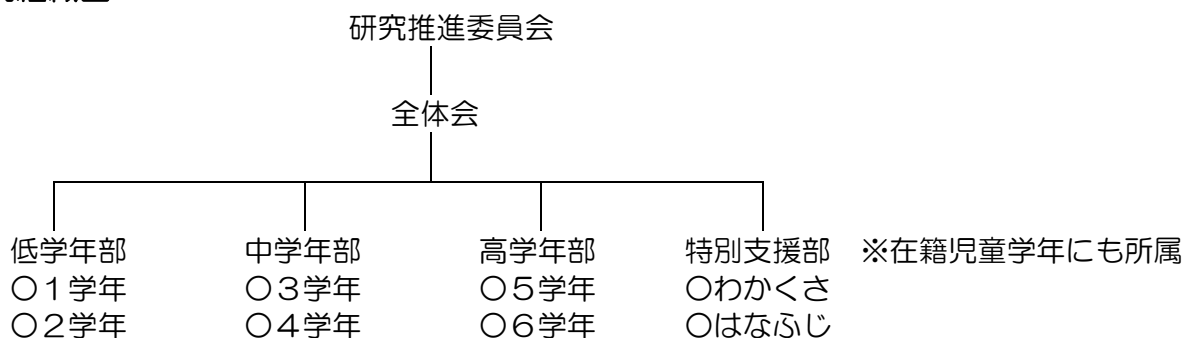
(2) 研究全体会

年度初め、1学期末、年度末に研究全体会をもち、研究への理解を深めたり、成果と課題を共有し合ったりする。

(3) OJTで研究の日常化を図る。

カリキュラムマネジメントの時間を利用して、授業についても語り合い担任力を高める。
 日常の授業が子どもの力を育むものになっているか、「次の単元の構成は?」、「明日の発問は?」など具体的に話して、普段から教室を開き授業を見合う。

研究組織図



5 研究計画

研究の計画

回	日程	内容	授業者	教科	事前研・事後研進行	事後研 便り	付箋・ 写真
	4月5日(水)	推進委員会	今年度の研究について 検討				
	4月17日(月)	全体会	今年度の研究について 提案 協議 共通理解を図る。				
1	5月2日(火)	大研 森田先生	6年 熊坂		推進委員会		
2	6月1日(木)	小研①	5年 佐藤				
3	6月21日(水)	小研②	6年 高橋				
4	6月21日(水)	小研③	1年 片山				
5	6月28日(金)	七中校区連携 合同授業研究会	6年 武口				
6	月12日(水)	小研④	3年 大沼				
7	7月12日(水)	小研⑤	特支佐藤				
	7月19日(水)	事務所訪問					
	7月25日(水)	推進委員会	各学年で1学期の研究をふり返り、それをもと成果と課題を整理して、全体会に提案する。				

	7月26日(水)	全体会	1学期の研究をふり返る。 成果と課題を整理して、共有する。				
8	9月6日(水)	小研⑥	特支武田				
9	9月6日(水)	小研⑦	5年 渡邊				
10	9月15日(金)	大研 森田先生	4年 和田		推進委員会		
11	10月11日(水)	小研⑧	3年 小池				
12	10月30日(月)	大研 (外部講師)	特支黒坂		推進委員会		
13	11月15日(月)	小研⑨	4年 中田				
14	11月29日(水)	小研⑩	2年 石山				
15	12月6日(水)	小研⑪	予備				
16	12月13日(金)	小研⑫	1年 村井				
17	1月17日(水)	小研⑬	2年 渋谷				
	1月19日(金)	学年会 (カリマネの日)	今年度の成果と課題を話し合う。				
	1月22日(月)	推進委員会	今年度の成果と課題の共有する。 来年度の研究の方向性を協議する。				
18	2月6日(火)	大研 森田先生	2年小野		推進委員会		
	2月7日(水)	全体会	今年度の成果と課題の共有する。 来年度の研究の方向性を協議する。				